

歴史紀行 18

幕末の宇和島藩家老・松根図書

三好 昌文



贈正五位 松根図書
(松根敦子氏蔵)

松根図書紀茂は、吉見長左衛門（伊能友陽）らと並ぶ、幕末宇和島藩を代表する家老で、図書は八代藩主伊達宗城とは水魚の交わりをした謀臣として知られている。

松根家の祖は、出羽国山形城主・最上義光の弟義保に発する。義保の戦死後、その子光廣（幼名長丸）は義光の養子として育てられ、やがて庄内の地に一万三千石を領し、その城館の所在地名によって、松根備前守光廣と称した。しかし、光廣は最上騒動によって、幕府から九州柳川藩主立花宗茂に預けられた。また、義光の妹義姫は米澤城主伊達輝宗に嫁し、政宗を生んでいる。だから、光廣と政宗はいとこの関係にある。光廣の子図書守宣は、仙台藩主伊達忠宗によって伊達家一門と認定され、宇和島藩の御一門並家老となる。

図書紀茂（号三楽）は、文政三年（一八二〇）十二月七日生まれ（幼名豊次郎）、嘉永四年（一八五二）九月二十七日嗣家、やがて軍事・藩学・財政・外交を担当して、宗紀の信頼も厚く、家禄七百石であった。

宗城は義父宗紀（春山）同様、水戸藩主徳川斉昭の尊主攘夷論の強い影響を受け、図書も斉昭に信任された。宗城は外様雄藩大名の多い大広間詰で



松根内蔵（図書の子、権六）
(横浜開港資料館蔵)

同志糾合の旗振り役を果たし、御三家の名古屋藩、老中阿部正弘に接近した。嘉永六年ベリ来航、開国の情勢のなか、尊攘論の急先峰となったが、日米修好通商条約の締結とともに、福井藩主松平慶永の説得により攘夷論を捨て、一橋派、公武合体派に転じた。このころから、宇和島藩は尊攘派から「因循」と批判されるようになる。かつ、強大な藩主権によって藩論は統一され、派閥の形成や抗争もなく、一人の殉難者を出すこともなかった。図書も宗城の股肱として、この路線を忠実に追求したといえよう。

図書は宗紀の属従頭、宗城の代に弘化四年（一八四七）若年寄役、宗城の構想する御庄組海岸砲台（久良台場）を視察した。安政元年（一八五四）着座に昇進、翌二年斉昭から「白鞘御刀并白銀」を賜わり、さらに老職加判、藩学明倫館頭取、同四年五月旗本頭、文久三年（一八六三）五月、「急務専可被取計」という、宗城の上京、公武合体派としての政治活動を補佐し、「国事周旋」に専心することになる。

安政の大獄に際し、宗城は依頼隠居して帰国し、吉見長左衛門は重追放処分を受けた。このため、図書は前面に姿を現す。大獄後、水戸藩士住谷寅

之助らが井伊直弼襲撃に参加する同志獲得のため宇和島に来た。肝心の図書はこれを拒否し、尊攘派と対立し、批判を受けるようになった。

図書の殖産興業策としては、木蠟・茶・寒天・海産物の増産による長崎貿易の振興、さらに兵庫開港の準備などがある。このため物産方の強化、卯之町の清水（池田屋）長十郎、川之石の矢野小十郎、八幡浜の高橋長平・菊池清治、城辺の矢野安雲三郎、播磨国出身の松尾臣善らを登用した。また、富国強兵策のため、斉昭の家臣菊池為三郎（多田慎之助と変名、高野長英（伊東瑞溪、薩摩の中井弘（田中幸輔）・五代才助（友厚）らの来藩と交流は、図書の役割が大きい。

第一次幕長戦争の時、図書は大坂城での軍議に列し、大目付水井尚志に七卿・三家老の処分、萩藩支藩の帰順、藩主毛利敬親、元徳父子の罪名の予定、萩藩が抗命の時は即時攻撃（四境攻め）の四件を建築した。これは幕府の施策と一致し、萩藩尊攘派を徹底して敵視していた。征長総督徳川慶勝が広島に進むと図書も行き、強硬論を主張している。

鹿兒島藩の公武合体派と尊攘派は、宇和島藩をうまく操縦し、幕府支持に



従二位 伊達宗城
(横浜開港資料館蔵)

まわらせないようにした。たとえば、慶応二年六月、英公使パークスの来航は、一つには英国の諸藩との貿易拡大を目的としていた。しかし、宇和島藩にはその積極的な殖産興業策にも拘らず、木曜位しか貿易品がなかった。その来航は図書や五代の画策もあった。五代はしきりに第二次幕長戦争の勝利を知らせ、パークスの来航によって宇

和島藩の参戦を防がせようとした。図書に対し、秋藩諸隊の戦果を認識させ、松山藩の轍を踏むなど警告している。宇和島藩の蒸気船は、長崎から小倉藩に武器を輸送し、藩士二人が幕府の軍艦回天丸に乗って観戦していた。西郷隆盛らはその宇和島藩、宗城―図書の路線に批判的であった。

戊辰戦争のなかでも、宇和島藩は箱館戦争への派兵にも応ぜず、その一藩割拠論は時代の動向から跋扈的になつていった。宗城・宗徳は一時処分され、図書・桜田出雲は家老を退任させられた。薩長土肥が新政府の官僚制を確立させるなかで、宗城・井関盛良(齋右衛門)を除いて排除されていく。図書は奥羽越列藩同盟の盟主となった仙台藩を援助したが、明治十七年三月四日に病没している。

みよし・まさふみ 前松山大学法学部教授。一九三〇年生まれ。現住所 宇和島市堀端町二一四二。主著『松根図書関係文書(佐川印刷所)』『三好昌文著作集』全三巻、第一巻「幕末期宇和島藩の動向―伊達宗城を中心に」(同)